資料紹介

上黒岩遺跡出土石器 2

Stone Implements Excavated at the Kamikuroiwa Site, Part 2

WATANUKI Shun'ichi

綿貫俊一

上黒岩岩陰遺跡は愛媛県上浮穴郡久万高原町 美川 上黒岩 1092 番地，通称簗瀬に所在する四国山中の岩陰遺跡である。この遺跡の発掘調査報告書は 2009 年 9 月に刊行された［春成・小林編 2009］。その際に収載することができなかった石器類の実測図を追加報告として掲載する。ここで提示する資料は上黒岩岩陰の報告書（第 3 部・出土遺物 , 第 2 章・石器；2009：298）表 14 の図 No.520 に連続する番号として 521 ～ 558 までの図番号をつけた。

（解説）

4 層　521 は石鏃の未成品で，破損している。

6 層　523 は有茎尖頭器の未成品と考えられるが明確ではない。526 は削器としておくが，石篦の未成品である可能性を有している。527 も石篦としておくが，表裏に平坦剥離を施した例で，7 ～ 9 層から遊離したものだろう。543 は節理があり，ステップが著しく石斧未成品となったものだろう。547 は敲石で，石材に緑色片岩を用いる。右側面に打痕，下端部に衝撃による剥離痕（破損）とつぶれた細かい剥離痕がある。

8 層　528・529 は石篦で，下半部が破損した基部側の例。

9 層　522 は C 拡張区 9Ⅲ層で出土した有茎尖頭器の破損品である。器面調整に技術的に未熟ながら斜状並行剥離が観察されるので有茎尖頭器と判断した。なお斜状並行剥離は右辺で右上方から左下方向へ施され，左辺で左下方から右上方へ施されるのが特徴である。この技術は本州・四国に特有なものであるが，北海道の有茎尖頭器はこれと逆になっている［難波 2002］。北海道に本州・四国型の斜状並行剥離が及ぶのは，大正 3 遺跡の爪形文土器段階からであるといち早く理解したのは長井謙治で，2008 年 3 月に東京大学提出論文で述べているほか，近年も詳細な斜状並行剥離の地域的特質について述べている［長井 2009］。筆者も「発掘された日本列島」や山原敏朗の速報・論文でそのことを強く理解することができた［綿貫 2009］。524 は有茎尖頭器の未成品と考えられ，基部を半円形にしようとする意図が窺える例で破損している。530 は楔形石器で，上下両端方向からの剥離が表裏にある。531 は有茎尖頭器の未成品か。532･533･535 は石篦で，上半部や下半部が破損した例。536 は片刃石斧で，中ほどから基部側が破損している（C 拡張区 9Ⅲ層出土）。表面側がいわゆる前主面である。548 は細長い緑色片岩を用いた敲石。下半の右側面と下半に打痕。6 層の敲石に共通する形と打痕の位置を示す。550 は石核で，上下両端方向からの剥離痕がある。あるいは敲石の破損が進んだものか。549 の平面形は楕円形，側面系は楕円形をした小振りの石器製作

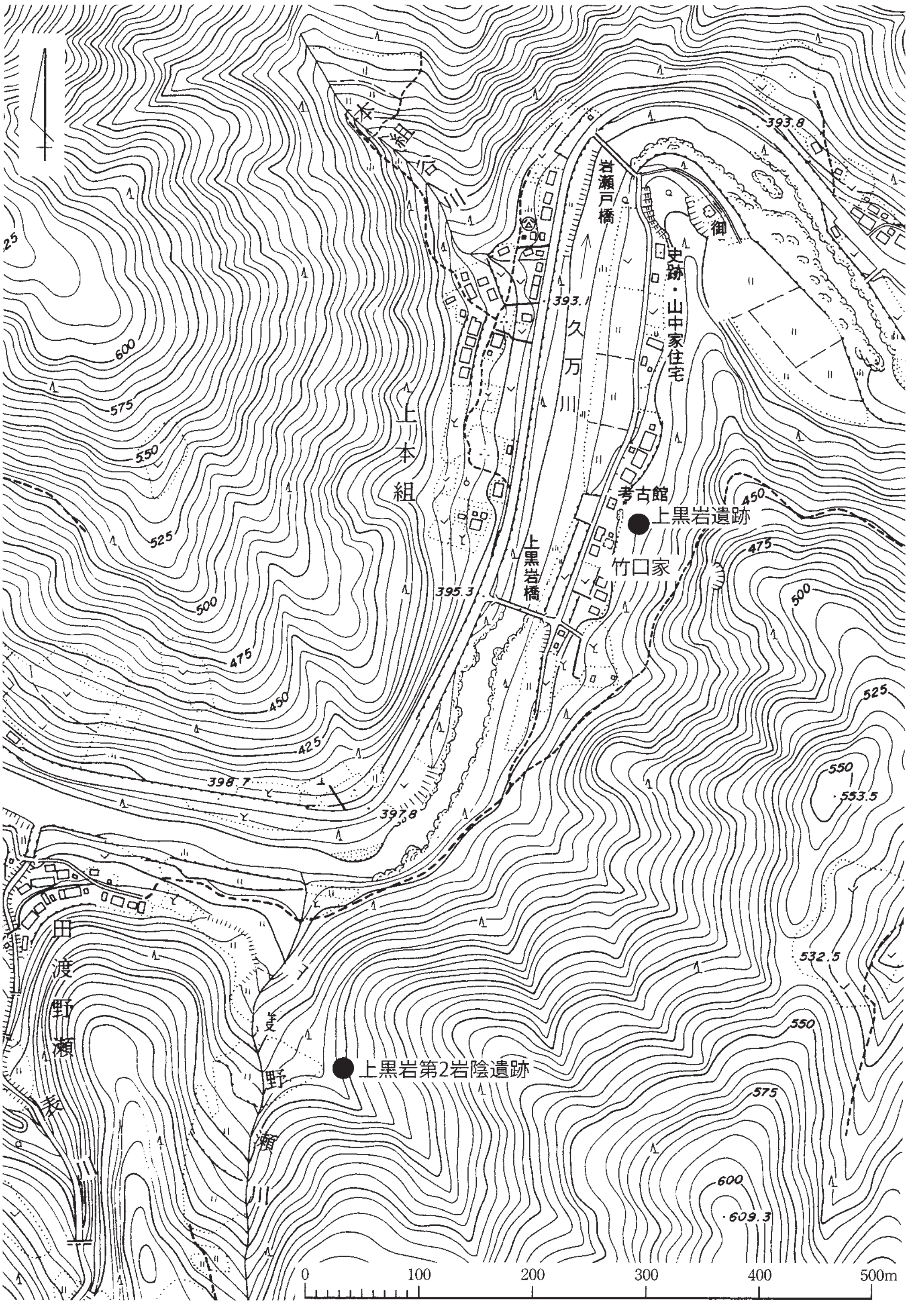


図１　上黒岩岩陰遺跡の位置　S＝１／5,000

用の敲石である。551は楕円形拳大の敲石で，周囲に著しい打痕が残る。

不明　525は調整を加え始めた初期段階で，有茎尖頭器の未成品と考えておくが，基部を半円形にする意図が窺えない。これから半円形の基部にしていく段階か，裏面で基部の縁辺部の調整をみると奥行きのある剥離を意図していないので，あるいは石箆か。537はノミ状の小型石箆で，形を見ると明らかに刃部を意識した刃部の作りだしである。表面側は左辺方向，裏面側の左辺方向と表裏で対向する調整となっている。538は赤色硅質岩の石核で，注記に「粘土層」とあるので，9層出土の可能性がある。539は小型の石箆。540は掻器と考える。裏面の下端部に素材剥離に先行する面が残っており，この面を打面に表面側下端部に刃部作出剥離を行う。したがって明確に二次加工かどうかの判断がむづかしいが，右側縁側との境界付近の剥離が裏面のポジ面を切っていることから二次加工と判断する。541・542は剥片とUF。543は石箆の未成品で節理が多数入っており，ステップが生じるなど質は不良。544は板状の初期剥片を用いる。545は石箆の素材か。砥石として用いられた無斑晶質安山岩を割りとり，石箆への加工途上の未成品。546は台石として用いられた後，幅広い剥片を割りとり，石箆への加工途上の未成品。そのため裏面に打痕が残る。552は凹石・敲石で，下端部が敲打による破損部，上端・両側面に敲打痕，表裏両面に二箇所づつの円形の凹部が残る。6層例に酷似する。553も両端を中心として一部側面にも打痕が残る。554は大型の幅広剥片で，無斑晶質安山岩を石材とすることと大きさからあるいは石箆の素材剥片か。555は楕円形の小振りな敲石で，石器製作用と考える。両端，表裏両面，右側面に著しい打痕がある。556は台石としての受けによる打痕と線状痕が表面にある礫器である。刃先は自然の傾斜面と加工痕からなる両刃礫器。557は両側に敲石としての打痕と表裏に凹部が観察できる両刃礫器。図9－9は砥石の破片で，線状痕が表面に観察できる。受熱し破損している。本例は上黒岩第2岩陰遺跡出土である。

小結

今回報告呈示したのは38点。そのうち出土層位の判るものが21点である。数量的に多くなく，しかも格別なものはないが，報告書を補うものである。これまで隆起線文土器段階である7・8・9層の石器類のうち，楔形石器，石斧，敲石は必ずしも多いといえるものではなかった。楔形石器は充来，縄文時代早期の遺跡でしばしば見かけることが多い石器であるが，今回も楔形石器を呈示できたことは，隆起線文土器段階にも共伴することを追証したことになる。また多量に出土している縦割獣骨の打割方法を検証する際の参考資料となる。石斧は基部側が古く破損した例で，甲高であり，上黒岩岩陰には少ない長者久保・神子柴系の系譜に連なることを思わせる。

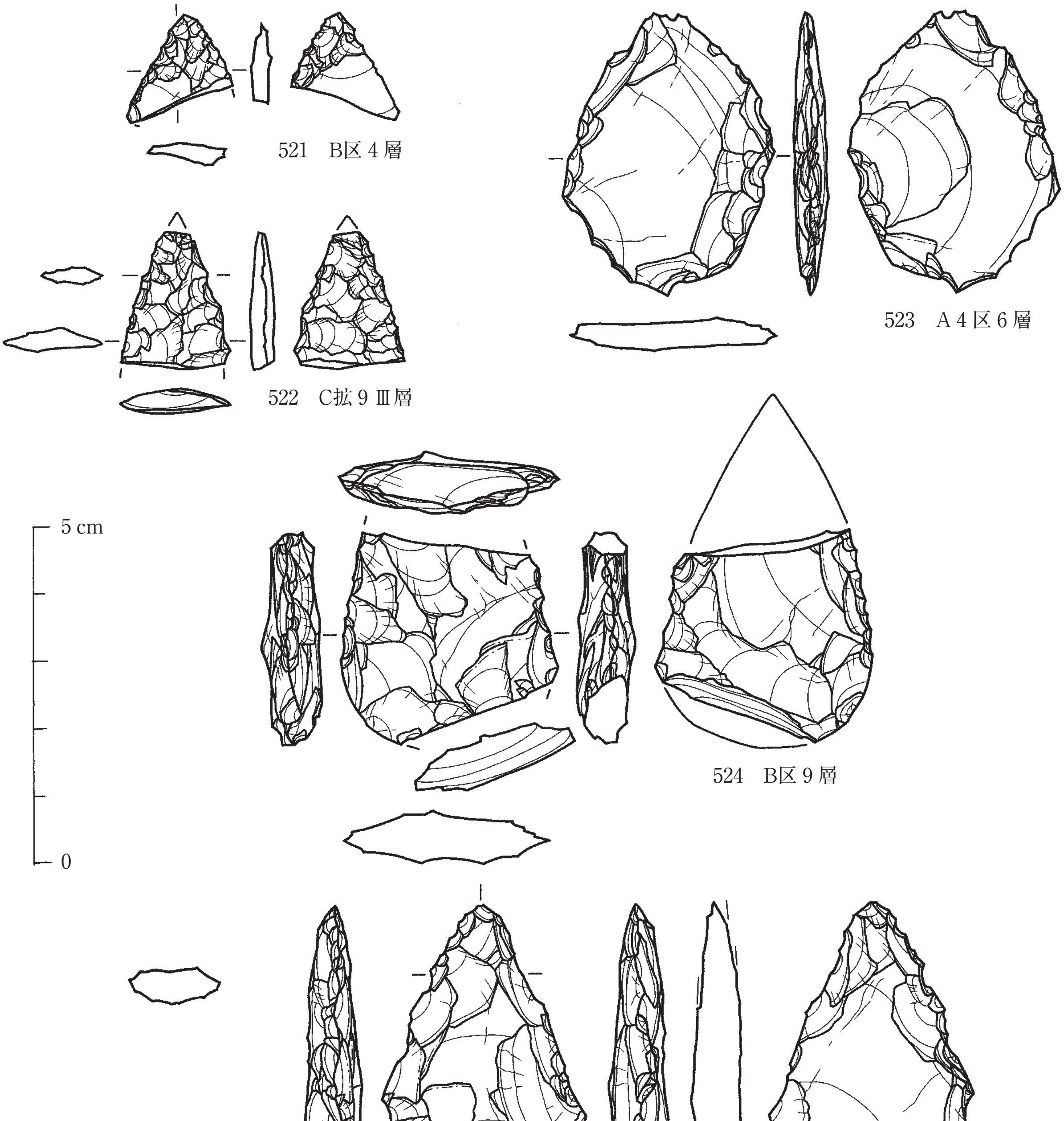


図 2　上黒岩岩陰出土の石器類 1

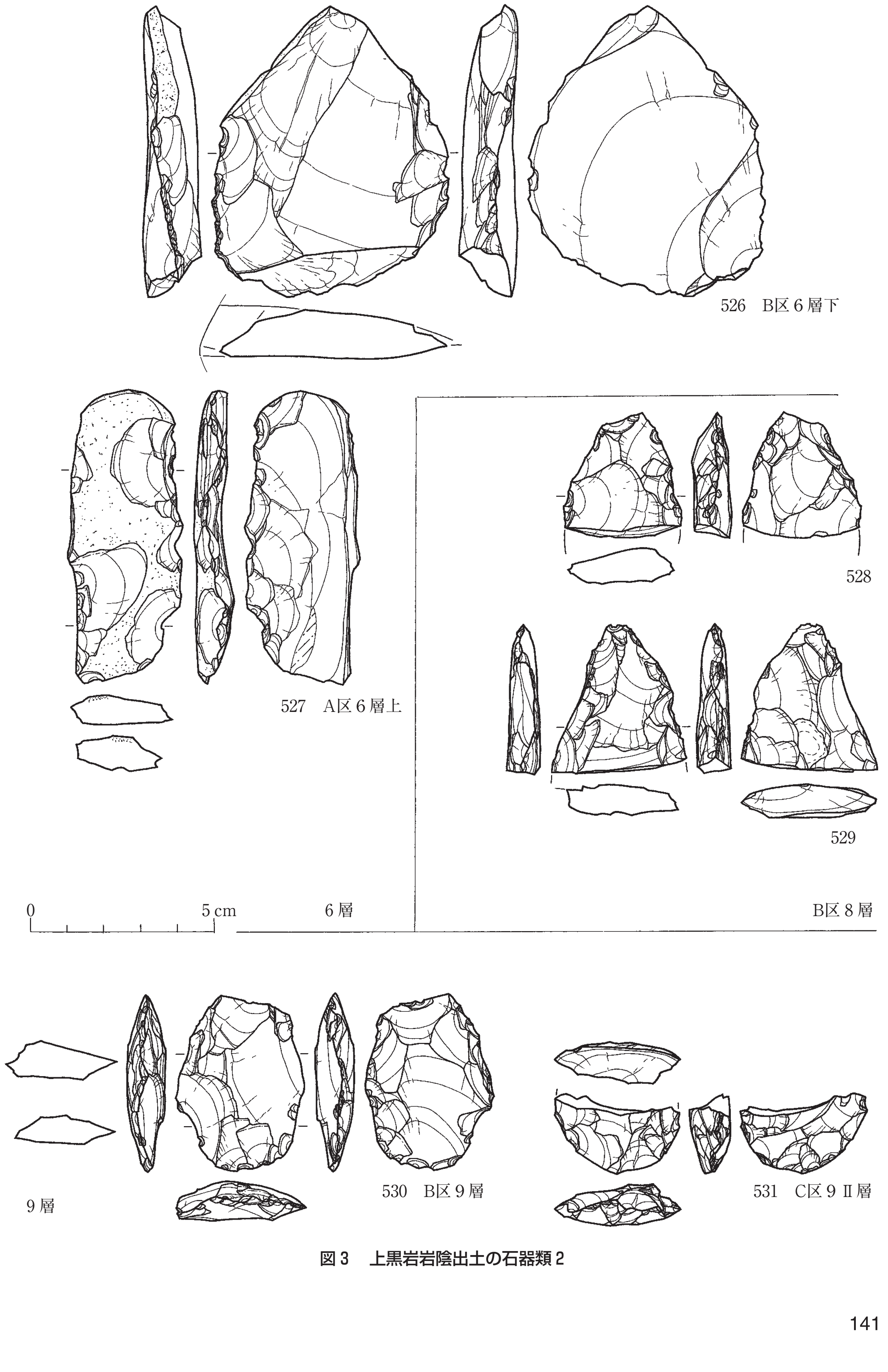


図３　上黒岩岩陰出土の石器類２

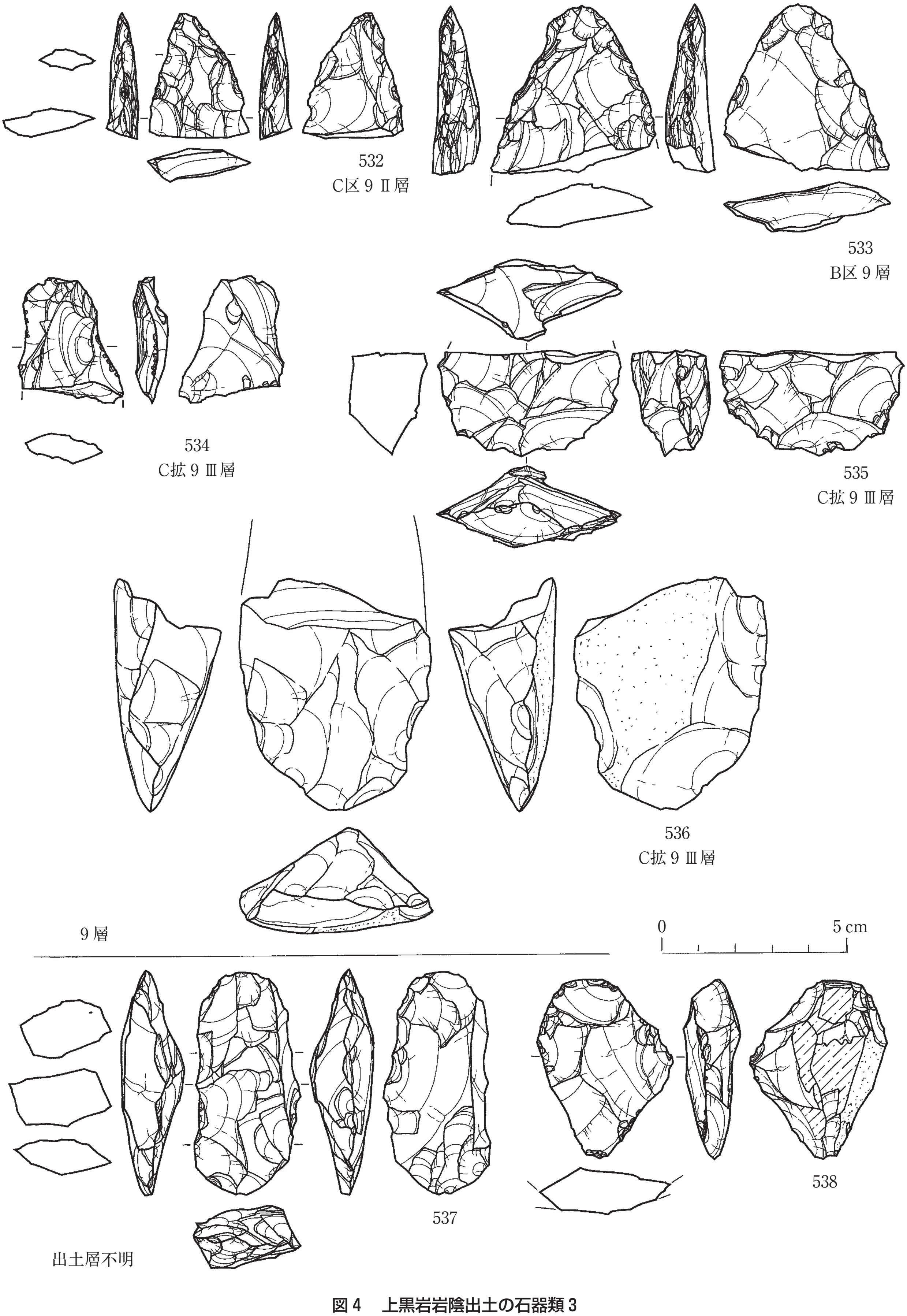


図4　上黒岩岩陰出土の石器類3

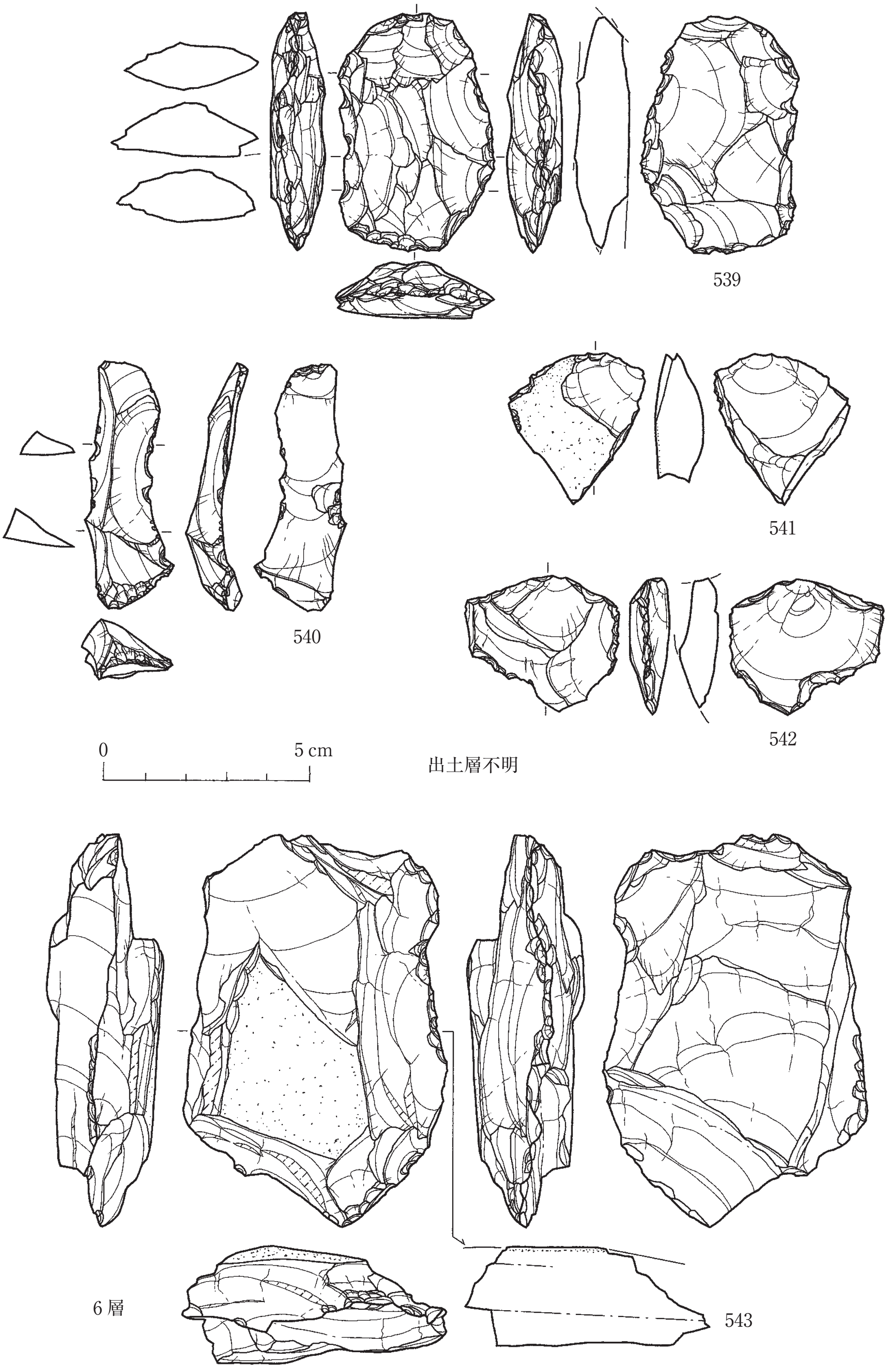


図 5　上黒岩岩陰出土の石器類 4

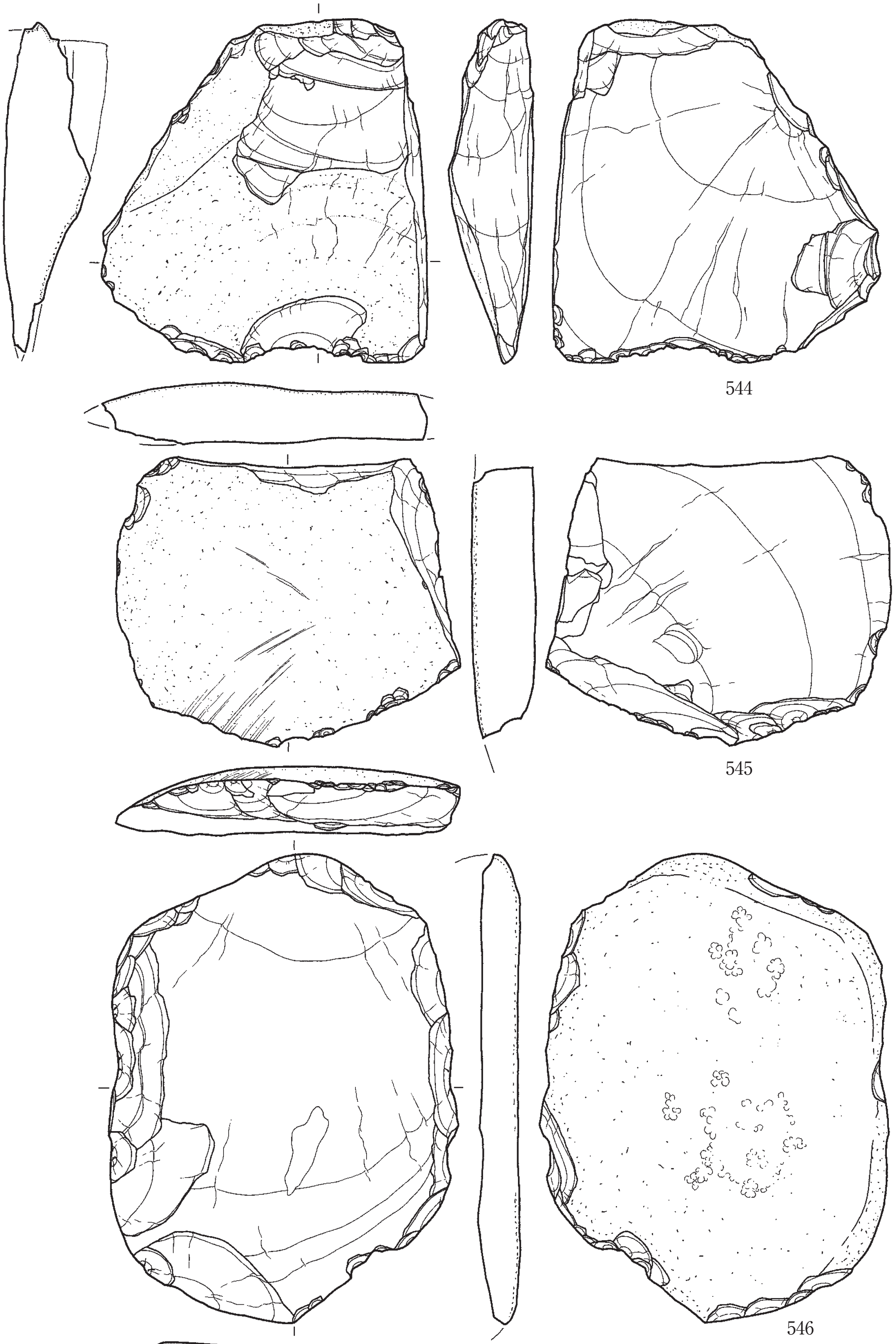


図 6　上黒岩岩陰出土の石器類 5

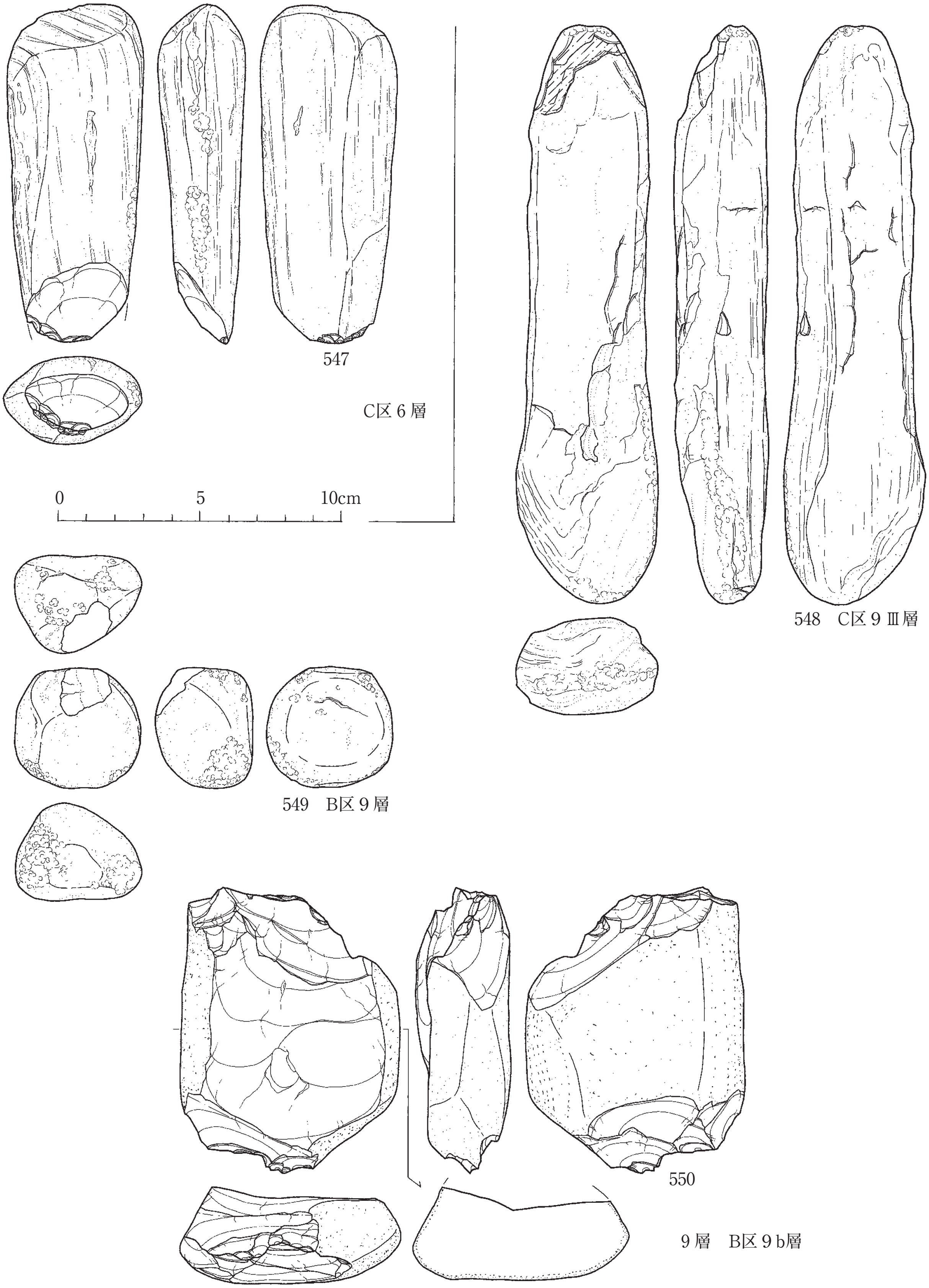


図 7　上黒岩岩陰出土の石器類 6

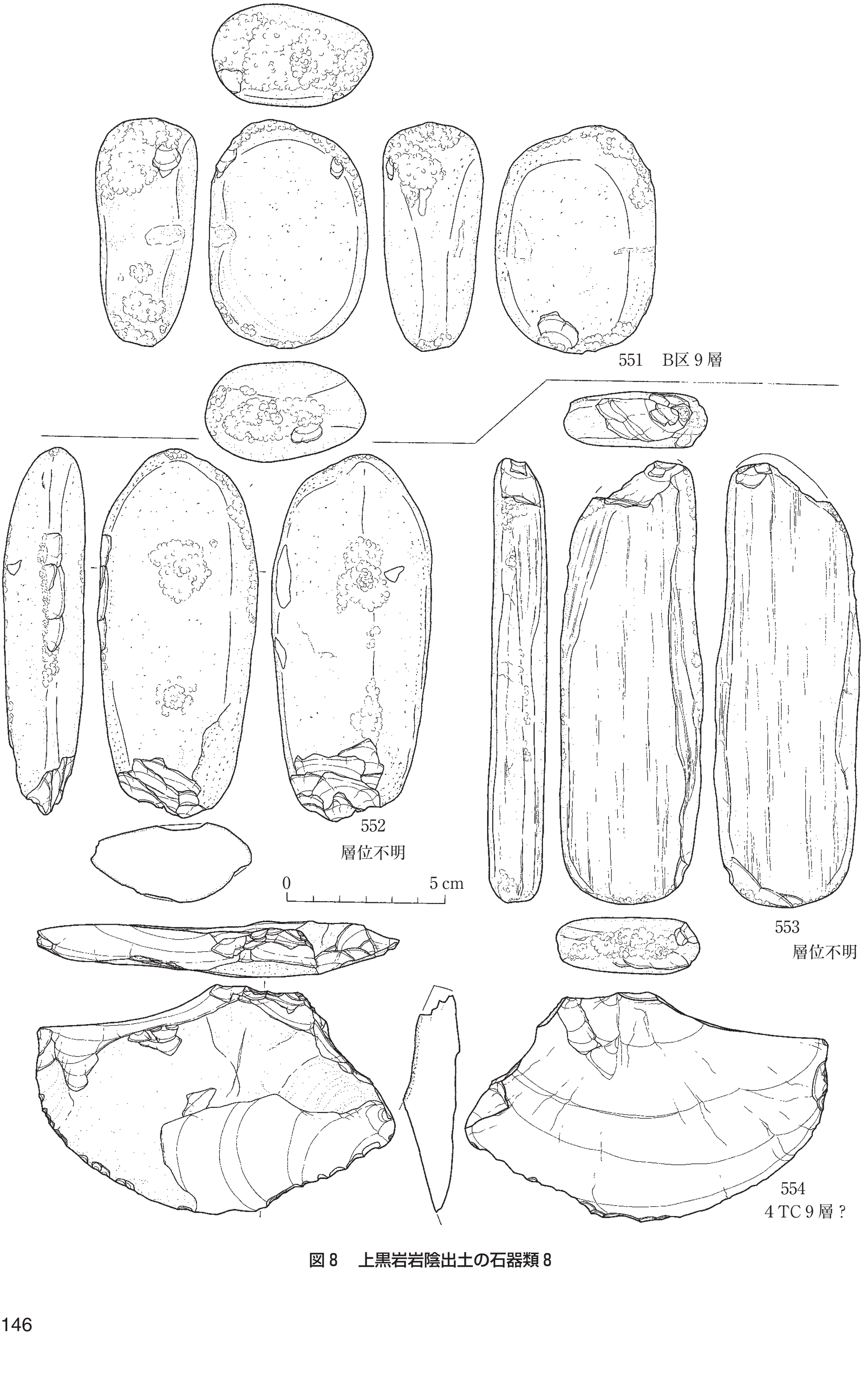


図 8　上黒岩岩陰出土の石器類 8

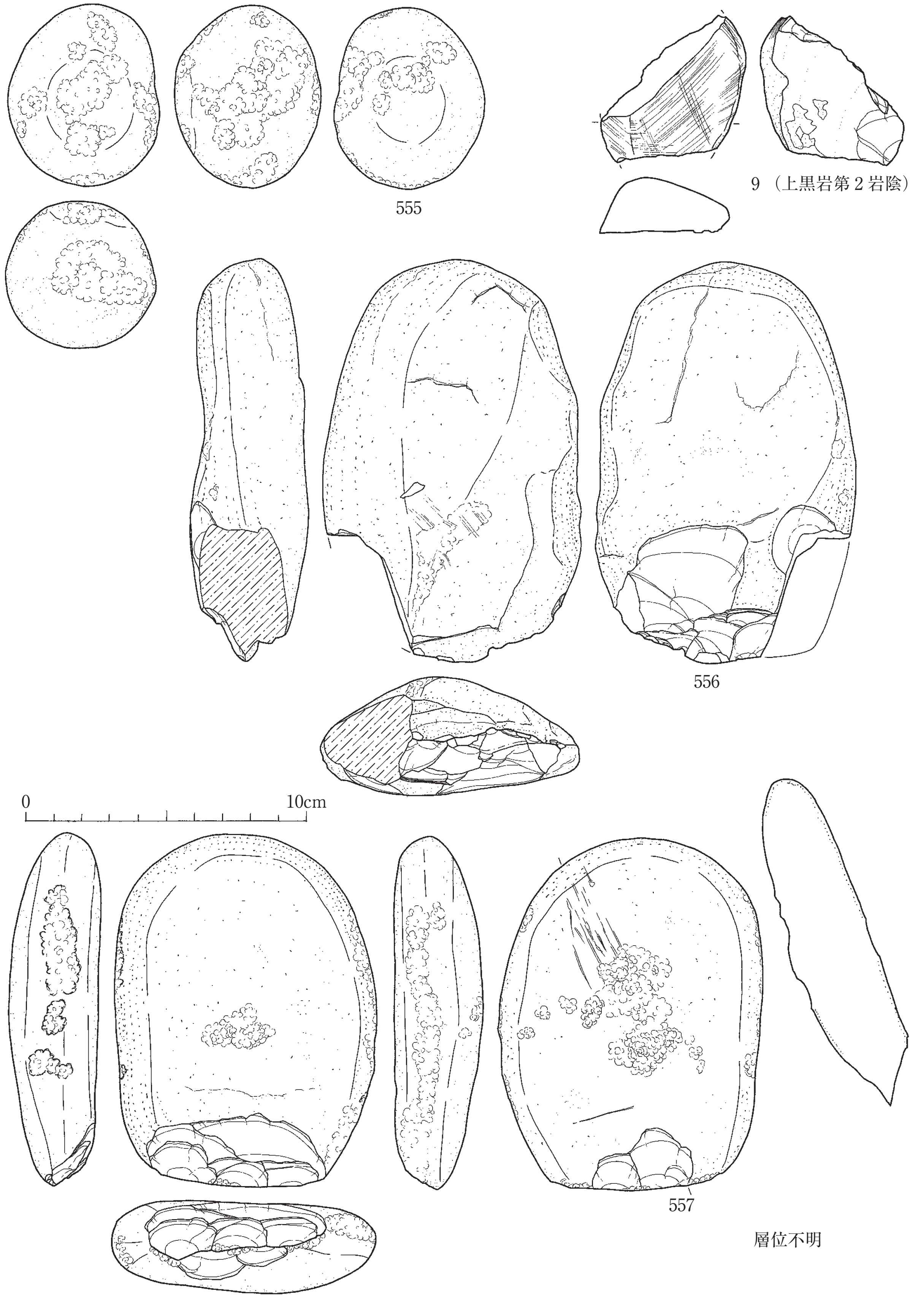


図９　上黒岩岩陰出土の石器類７

表1　上黒岩岩陰遺跡・上黒岩第2岩陰遺跡出土石器観察表

図No.	器種	長(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	欠損	調査次	出土区	層位	備考	整理No.	注記	箱No.	写真	収蔵
521	石鏃	15.72	15.62	3.26	0.55	赤色珪質岩	下半	4	B	4	西南落込み	432	K4-B-40004	Ⅳ-89	521	慶應
522	有茎尖頭器	20.02	15.71	3.66	1.15	チャート	下半	3	C拡	9Ⅲ	`62.10.15	366	K3-C拡-93022	Ⅲ-42	522	慶應
523	有茎尖頭器未成品?	41.6	30.69	4,67	6.08	頁岩		4	A4	6		413	K4-A4-60121	Ⅳ-86	523	慶應
524	有茎尖頭器未成品	31.79	32.2	8.23	9.86	赤色硅質岩	上半・基部	4	B	9		443	K4-B-90011	Ⅳ-94	524	慶應
525	石鏃未成品	42.34	30.5	8.29	11.18	赤色硅質岩		4	?	?		464	K4-G-00029	Ⅳ-1	525	慶應
526	削器	76.37	63.58	15.28	81.51	無斑晶質安山岩		4	B	6下		433	K4-B-61081		526	慶應
527	石篦未成品	78.93	30.98	10	27.38	無斑晶質安山岩		4	A1~A4	6上		412	K4-A-61012	Ⅳ-86	527	慶應
528	石篦	33.18	32	10.37	11.06	無斑晶質安山岩	下半	4	B	8	`69.8.6,No.26	437	K4-B-80001	Ⅳ-93		慶應
529	石篦	40.19	36.37	8.51	12.79	無斑晶質安山岩	下半	4	B	8		394	K4-B-80012	Ⅳ-43		慶應
530	楔形石器	47.21	34.44	10.23	14.54	無斑晶質安山岩		4	B	9		412	K4-B-90043	Ⅳ-94		慶應
531	有茎尖頭器未成品	21.51	34.06	11.16	6.51	硅質頁岩	上半	3	C	9Ⅱ	`62.10.17	336	K3-C-92188			慶應
532	石篦	33.42	26.74	6.85	6.15	無斑晶質安山岩	下半	3	C	9Ⅱ		338	K3-C-92422			慶應
533	石篦	43.01	44.66	10.18	18.29	無斑晶質安山岩	下半	4	B	9	第二黒	447	K4-B-90023	Ⅳ-94		慶應
534	剥片	35.67	28.03	8.81	6.81	チャート	左半	3	C拡	9Ⅲ	3C`- 6232	310	K3-C拡-93015	Ⅲ-42		慶應
535	石篦	28.76	49.52	20.48	22.49	頁岩	上半	3	C	9Ⅲ	`62.10.17	348	K3-C-93237	Ⅲ-41		慶應
536	石斧	63.36	51.97	27.6	72.04	輝石安山岩(象肌状)	上半	3	C拡	9Ⅲ	`62.10.15	371	K3-C拡-93034	Ⅲ-42	536	慶應
537	石篦	59.9	28.05	14.69	26.07	無斑晶質安山岩		2	1TD	?	(象肌状)	385	K2-D-01056	Ⅱ-7	537	慶應
538	石核	47.97	35.31	14.62	21.87	赤色硅質岩		2	1TD	9?	`62.7.28,粘土層	384	K2-D-01019	Ⅱ-7	538	慶應
539	石篦	57.61	39.48	13.55	31.57	珪質岩		4	?	?		460	K4-G-00007	Ⅳ-1	539	慶應
540	掻器	59.73	20.27	7.58	7.97	チャート		4	?	?		461	K4-G-00011	Ⅳ-1	540	慶應
541	剥片	36.6	32.36	12.14	12.94	無斑晶質安山岩		2	4TC	?		451	K2-C-02033	Ⅱ-13	541	慶應
542	UF	32.82	37.26	9.8	10.25	無斑晶質安山岩		5	?	?	掻器?	478	K5-G-00010	Ⅴ-1	542	慶應
543	石斧未成品	96	65	28	161.26	無斑晶質安山岩		2	1TD	6	第二黒土	387	K2-D-01018	Ⅱ-7		慶應
544	削器	86.14	80.97	20.52	165.21	無斑晶質安山岩		2	4TC	?		450	K2-C-02014	Ⅱ-13		慶應
545	石篦未成品	72.37	88.31	16.25	132.72	無斑晶質安山岩	上半	2	4TC	?	砥石転用	449	K2-C-02013	Ⅱ-13		慶應
546	石篦未成品	117.42	87.69	12	204.22	ドレライト粗粒玄武岩		2	2TD	?	台石転用	326	K2-D-02624	Ⅱ-8		慶應
547	敲石	119.82	48.18	31.01	259.61	緑色岩		3	C	6	緑泥石英片岩	481	K3-C-60004	Ⅲ-33		慶應
548	敲石	205	49.07	33.04	510	緑色岩		3	C	9Ⅲ		356	K3-C-93179	Ⅲ-41		慶應
549	敲石	42.82	44.23	35.22	92.45	輝石安山岩		4	B	9	`69.8.7,No.52	415	K4-B-90033	Ⅳ-94		慶應
550	石核	100.15	78.19	32.23	332	無斑晶質安山岩		4	B	9b	敲石破損?	402	K4-B-92167	Ⅳ-96		慶應
551	敲石	85.54	60.56	38.16	295.62	輝石安山岩		4	B	9	`69.8.7,No.46	416	K4-B-90034	Ⅳ-94		慶應
552	凹石・敲石	139.85	60.91	30.13	390	緑色岩		2	1T		緑色石英片岩	327	K2-G-01001			慶應
553	敲石	169	54.3	21.27	370	緑色岩		4	?	?	3～4層	462	K4-G-00027	Ⅳ-1		慶應
554	剥片	87.42	138.4	16.93	215.15	無斑晶質安山岩		2	4TC	9?	第2・第3黄土層	448	K2-C-02011	Ⅱ-13		慶應
555	敲石	64.83	53.79	53.29	238.16	輝石安山岩		2	1TC	?		391	K2-C-01143	Ⅱ-6		慶應
556	台石・礫器	142.39	92.76	41.64	650	頁岩	左隅部	5	?	?	竹口氏寄贈	477	K5-G-00001	Ⅴ-1		慶應
557	台石・礫器	125.84	93.91	30.61	660	緑色岩		2	2TD	?	裏面擦痕	324	K2-D-02625	Ⅱ-8		慶應

9	砥石	46.54	53.35	23.98	67.41	無斑晶質安山岩	上半・下半	3	?	?	受熱赤化	476	K3-G-10008	Ⅲ-22		慶應

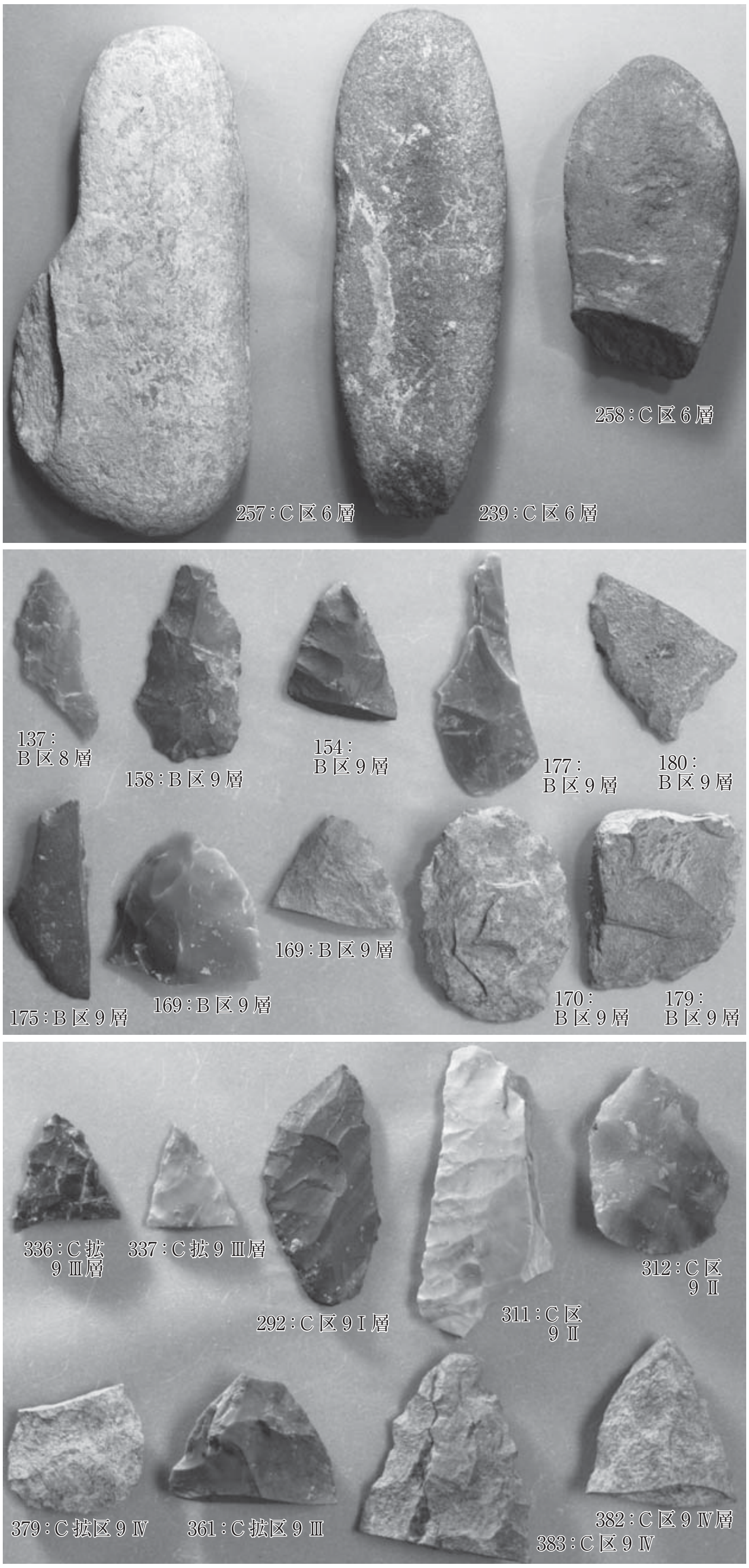
※注記のGは出土区不明・箱番号のうちⅠ～Ⅴは調査次を表し,数字は慶應収納していた箱番号・石材同定:パリノサーヴェイ(矢作・石岡氏他)

図No.521～558は国立歴史民俗博物館研究報告154集に掲載した上黒岩遺跡出土石器観察表からの通し番号

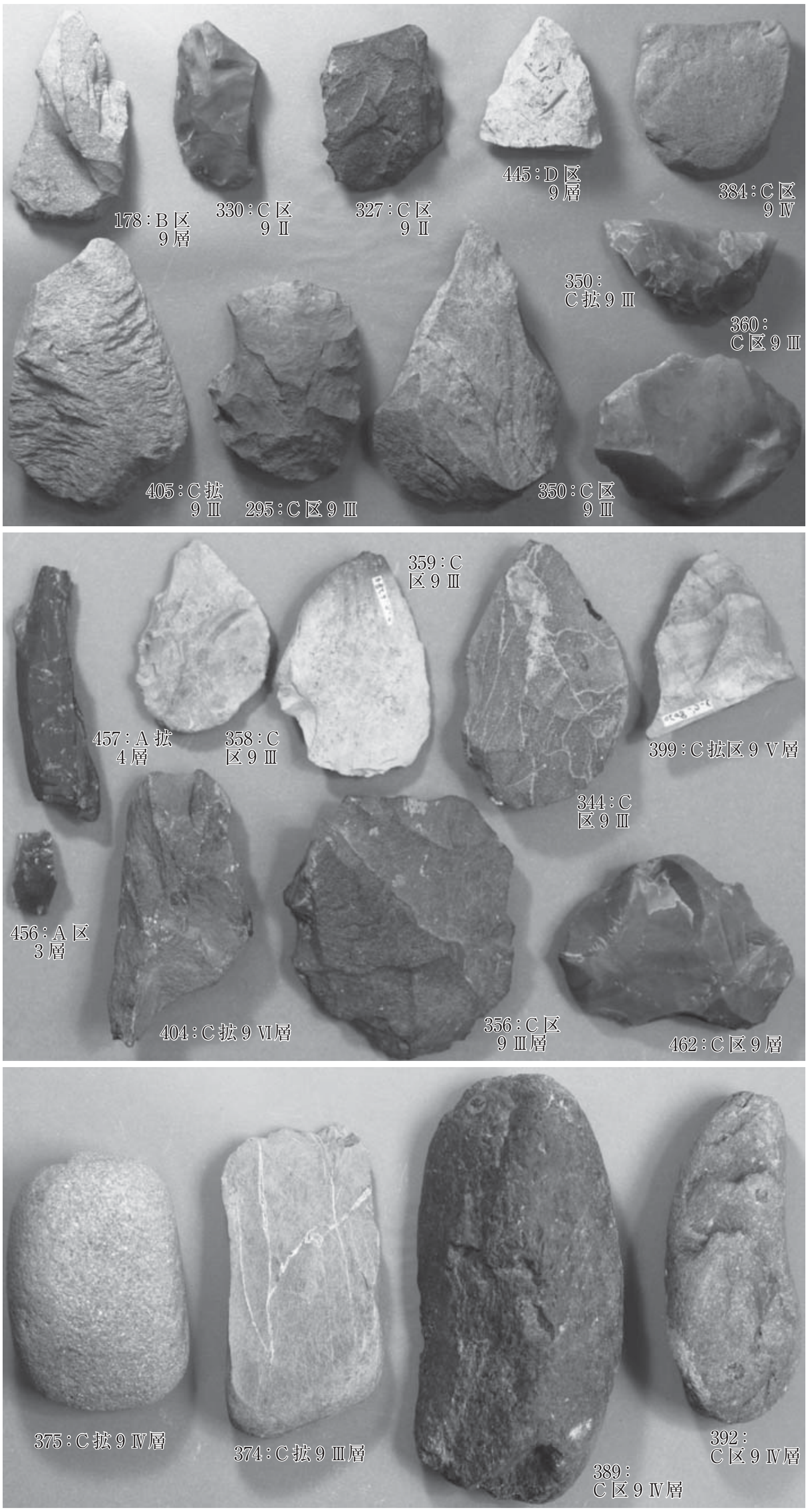
図No.9は国立歴史民俗博物館研究報告154集(P300,表16)に掲載した上黒岩第2岩陰(岩屋岩陰)遺跡出土石器観察表からの通し番号

※写真は写真図版に記載された図番号を示す。

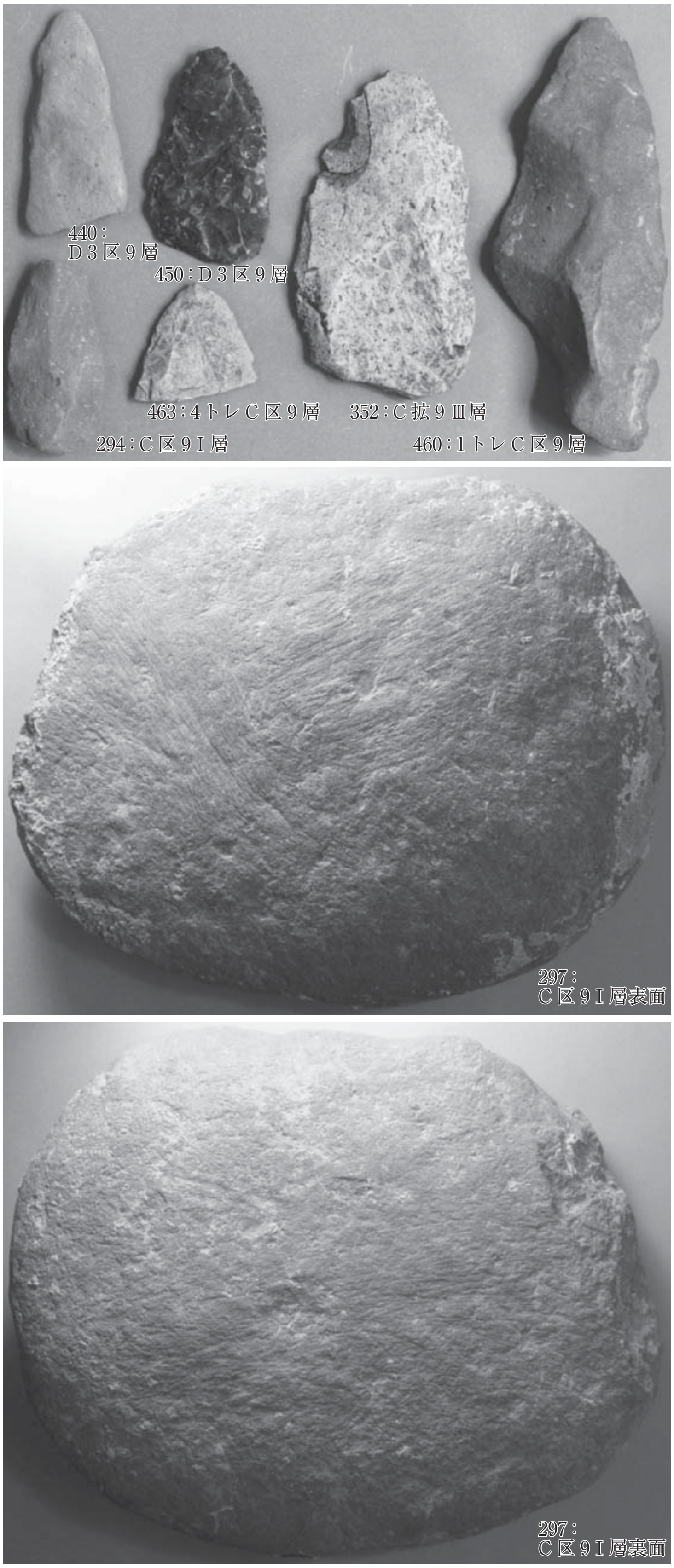
※写真図版については2009年発刊の報告書に記載された実測図で写真のなかったものについても一部の重要石器について載せている。


258：C 区 6 層
257：C 区 6 層
239：C 区 6 層
137：
B 区 8 層
158：B 区 9 層
154：
B 区 9 層
177：
B 区 9 層
180：
B 区 9 層
175：B 区 9 層
169：B 区 9 層
169：B 区 9 層
170：
B 区 9 層
179：
B 区 9 層
336：C 拡
9 Ⅲ層
337：C 拡 9 Ⅲ層
292：C 区 9 Ⅰ層
311：C 区
9 Ⅱ
312：C 区
9 Ⅱ
379：C 拡区 9 Ⅳ
361：C 拡区 9 Ⅲ
382：C 区 9 Ⅳ層
383：C 区 9 Ⅳ

上黒岩岩陰出土の石器

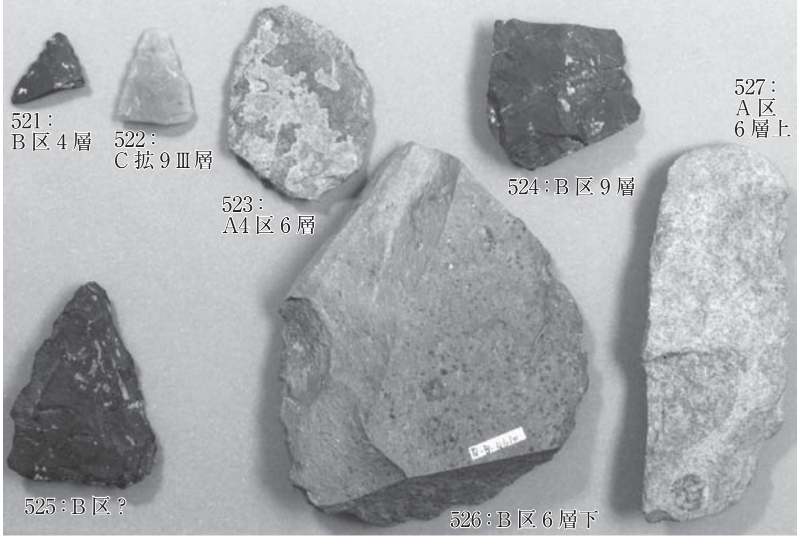

178：B 区
9 層
330：C 区
9 Ⅱ
327：C 区
9 Ⅱ
445：D 区
9 層
384：C 区
9 Ⅳ
350：
C 拡 9 Ⅲ
360：
C 区 9 Ⅲ
405：C 拡
9 Ⅲ
295：C 区 9 Ⅲ
350：C 区
9 Ⅲ
359：C
区 9 Ⅲ
457：A 拡
4 層
358：C
区 9 Ⅲ
399：C 拡区 9 Ⅴ層
344：C
区 9 Ⅲ
456：A 区
3 層
404：C 拡 9 Ⅵ層
356：C 区
9 Ⅲ層
462：C 区 9 層
375：C 拡 9 Ⅳ層
374：C 拡 9 Ⅲ層
389：
C 区 9 Ⅳ層
392：
C 区 9 Ⅳ層

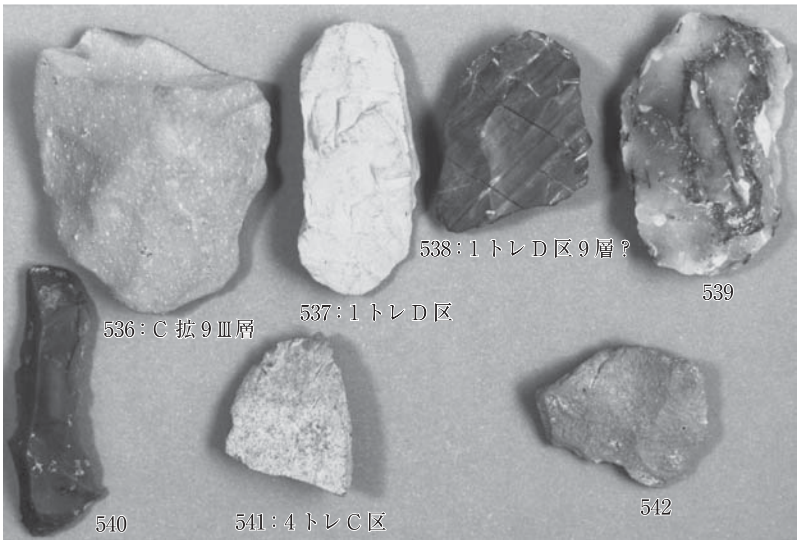
上黒岩岩陰出土の石器


440：
D３区９層
450：D３区９層
463：４トレＣ区９層
352：Ｃ拡９Ⅲ層
294：Ｃ区９Ｉ層
460：１トレＣ区９層
297：
Ｃ区９Ｉ層表面
297：
Ｃ区９Ｉ層裏面

上黒岩岩陰出土の石器

上黒岩第２岩陰





上黒岩岩陰出土の石器（今回報告分）

今回の報告で上黒岩岩陰から出土した出土層の明らかな石器類のほとんどを提示した。この他は出土層の明らかな例が若干と，出土層が明確でない石鏃や敲石・台石・磨石・剥片がまだかなりある。機会があればこれらの資料についても報告していきたい。

参考文献

江坂輝彌・岡本健児・西田栄 1967「愛媛県上黒岩岩陰」『日本の洞穴遺跡』平凡社，224-236
鈴木道之助 1972「縄文時代草創期初頭の狩猟活動」『考古学ジャーナル』No.76，ニュー・サイエンス社，10-20
長井謙治 2009『石器づくりの考古学』ものが語る日本史，同成社
難波洋三 2002「大昔から人間は右利きだったのか」『博物ディクショナリー・考古のお話』京都国立博物館
春成秀爾・小林謙一編 2009『愛媛県上黒岩遺跡の研究』『国立歴史民俗博物館研究報告』第 154 集，国立歴史民俗博物館
山原敏朗 2007「北海道東部における更新世／完新世移行期の石器文化―帯広市大正遺跡群を中心に―」『公開シンポジウム　縄文文化の成立―草創期から早期へ―』予稿集，科学研究費補助金「日本列島北部の更新世／完新世移行期における居住形態と文化形成に関する研究」グループ
綿貫俊一 2009「第 3 部 第 2 章 石器」「第 4 部 第 4 章 上黒岩遺跡出土石器」春成秀爾・小林謙一編『愛媛県上黒岩遺跡の研究』『国立歴史民俗博物館研究報告』第 154 集，国立歴史民俗博物館，127-300，428-477

（大分県立歴史博物館，国立歴史民俗博物館共同研究員）

（2010 年 9 月 27 日受付，2011 年 5 月 20 日審査終了）